



深澤 航平 (ふかさわ こうへい) みなみ野小中
(みなみ野中) 3年生

作品名: 命がある幸せ

図 書: 世の中への扉 甲子園がくれた命

夏が来た。高校野球の季節だ。僕は高校野球を観ることが好きだ。毎年の恒例になっている。全力でグラウンドを駆け抜ける球児は、野球をやっていない僕でも憧れるし、何より心が動かされるのだ。それに僕には応援する高校もある。父の母校である、「日本大学第三高等学校（以下、日大三高）」である。甲子園の常連校である日大三高は、別に父が元野球部というわけでもないのに、やはり応援したくなる。2010年、この年、春の全国選抜高校野球大会で、日大三高は準優勝を果たした。この大会で大活躍し、チームを準優勝に導いたエース山崎福也選手は、あれから五年がたった今でも忘れられない選手である。そして、今回読んだ本は、僕に命の大切さについて教えてくれた、山崎福也選手（以下、山崎選手）の命の物語だ。

山崎選手は、中学校の頃から、高校野球の関係者の間でその才能が注目され、名門「日大三高」にスポーツ推薦での入学が決まった。入学する際に必要な健康診断を受けたときのこと。山崎選手の付添として一緒に病院に来ていた母親が、せっかくだからMRIで脳も調べてくれないかと医者に言ったそうだ。母親には一つ心配があったからだ。健康な山崎選手だが、祖父が脳腫瘍にかかったことがあるのだ。そして念のために検査を受けると思いもよらない結果がでた。「脳に腫瘍がある」という診断結果だ。その時の山崎選手はまだ中学三年生。ちょうど僕と同じ年齢だ。自分にもこんな診断結果が出たら…と思うと、きっとショックで何も考えられなくなってしまおうだろう。それに、脳の腫瘍は特に危険なもので、手術をしなければならなかった。ぜんぶとれなかったら、生きられても七、八年だとも言われた。このとき自分ならどう思うだろうか。きっとマイナス思考の僕だから、死を意識してしまって、自分で自分を追いつめてしまおうだろう。しかし、山崎選手は違かった。自分の命を心配するのではなく、日大三高で野球ができるかを心配したそうだ。それを耳にしたときは、驚くとともに、深い野球への愛情を感じた。考えてみれば、自分には、山崎選手のように命と同じくらい大事にできるものがあるだろうか。ある。

と胸を張って言えるだろうか。そう考えると、今回の出来事を通して、山崎選手は僕たちに、大好きだと言えるものをもつ、ある一つの物事を愛するということが、こんなにも強いのだと身を持って教えてくれた気がする。

「全摘出」手術は無事に、いや、奇跡に近い形で終わった。予定時間、十二時間の手術をたったの六時間で終わらせたのである。しかも、その後の回復も順調に進み、普通は一週間ぐらい起き上がれないはずなのに、山崎選手は手術の翌朝には体を起こし、兄の甲子園の開会式をテレビで観ていたそうだ。その頃は食欲もすごかったらしく、コメントでは、「手術が終わったあとは、もう、普通にしているだけでうれしかったんです。寝転がっているだけでもうれしかった。そんな状態だから、食べられるってことが本当にうれしくて、うれしくて。」

と話している。これを聞いたときは、生きているということがどれだけ幸せなことか、改めて考え直すべきだと思った。僕を含めて、今どきの人たちは何でも、「幸せになりたい」だとか、「なんて自分は不幸なんだろう」と自分が不自由なく生活している、生きている、ということに対する幸せを感じないでいる。でも、僕たちのような健康な生活は誰もが実現出来るわけではない。そこで、僕たちは、山崎選手が言ったような「食べることの幸せ」を当たり前幸せだと思ふべきなのだ。

このような苦しみをはねのける、強い精神力と野球愛で、山崎選手は甲子園常連校のエースという仕事を成し遂げたのだ。

僕が今回、この本を読んだのには理由がある。高校を卒業後、大学野球で経験を積むことを選択した山崎選手。そして今年、2015年のプロ野球ドラフト会議で、ついに、オリックス・バファローズから一巡目で指名され、入団を決めたからだ。このことを機に四、五年前に買った本をもう一度、読んでみる事にしたのだが。僕はやはり彼を手本にしたいと思う。命の大切さを教えてくれた、強く勇敢な山崎福也選手を。そして自分自身も変わっていく必要があると思う。今、生きていることに幸せを感じているのか。幸せはいつもここにあるのだ。彼はそう教えてくれた。